

毛沢東時代の悲劇、「数千万人の大飢餓死」の実態に迫る 2 冊の大著

——楊繼繩著『毛沢東・大躍進秘録』（文藝春秋）、フランク・ディケーター著『毛沢東の大飢饉』（草思社）

（神奈川大学名誉教授）小林 一美

毛沢東時代に史上未曾有の大飢餓死が発生したことは、1980年代以後、李銳の著書や香港の雑誌『七十年代』、『争鳴』や大陸から出ている雑誌『黄炎春秋』などで知り、餓死者が2000万人とか、3000万人とか、それ以上とか、いろいろの統計数字を読んで、その度に驚愕しつつ、真実とは思えなかった。餓死者の人数について、具体的な各県の数字を見たのは1995年以降で、『中華人民共和国地方志叢書』の中の各『県志』の閲覧を開始してからである。各県志の「人口」の項目には、必ず「非正常の死者」の数や「浮腫病に罹った人」の数が書いてあった。それは中国全土に及んでおり、その広範囲で凄まじい状況に驚き、多くのメモを作った。しかし、これを読む私の頭脳には、餓死者が死に至るまでの過程や原因、その全体像が具体的な姿で浮かび上がらないのであった。真面目だった中国共産党幹部たちが、どうしてこのような恐るべき事態を招いたのか。このような二つの世界大戦以上の死者が、どうしてこの科学文明の20世紀の時代に、且つまた戦争でもないのに生まれたのか。農民は死ぬまでに何をしていたのか、抵抗したのかどうかも分からなかった。

これから紹介する以下の両書は、私の数々の疑問に答え、長年の疑問を大幅に解決してくれた一大労作である。

1. 2 冊の著書、著者と各書の構成（「各章・小見出し」）について

この2冊とは、以下の①、②の著書である。

①『毛沢東・大躍進秘録』（楊繼繩著、邦訳書、全584頁、伊藤正・田口佐紀子・多田麻美訳、文藝春秋社、2012年3月、税込3,098円。原書は楊

繼繩『墓碑——1958-1962年、中国大飢饉紀実』（香港、天地圖書、2008年）。著者楊繼繩は、1940年に湖北省の農家に生まれ、清華大学を卒業後に新華社に入社した。養父をこの大飢饉で亡くした経験を持つ。1990年以後に、新華社の高級記者という地位を利用して、各地で資料を調査し、また多くの当時の指導者や農民から聞き取り調査を行い、本書の元になる『墓碑』を書いた。こうして出来た本書は、上は国際政治状況と党内部の権力をめぐる政治から、下は全国各地農村の県・人民公社・生産隊にいたる詳しい状況を掘り起こして、その驚愕すべき大飢饉の残酷な「人あい食み」、死屍累々たる惨状を、読むに堪えないほどの克明さで記録し、紹介した。原書は、上・下2冊、合計1200頁を越える一大労作である。邦訳書は、著者が作った原書の7割程度のダイジェスト版の邦訳であり、また詳しい数多くの統計資料や細かな説明を省いている。

『毛沢東・大躍進秘録』（『墓碑』）の目次は以下の通り。

序章「永遠の墓碑」（「なぜ養父は餓死したか」、「党を信じきっていた私」、「〈大躍進〉は人類史上最悪の惨劇」、「極権制度が諸悪の根源」）

第1章「モデル地区で何が起きたか」（「〈魚米の里〉での大飢饉——信陽事件」、「まかり通る嘘とごまかし」、「続発する粛清とリンチ」、「常態化する飢餓地獄」、「撲殺は正しい行為」、「中央に届かない情報」、「毛沢東の〈一本の指〉」、「いったい（河南省では）何百万人が餓死したか」）

第2章「周恩来は、なぜ毛沢東を止められなかったか」（「共産世界の指導者という野望」、「周恩来、「冒進」に反対す」、「毛沢東“反冒進”を批判す

る」,「周恩来は右派から50メートル」,「成都会議——用意されていた総路線」,「劉少奇は追随,鄧小平は是認」)

第3章「偉大なる実験,公共食堂の誕生から終焉まで」(「集団化で農村を支配する」,「人民公社は良い」,「資本主義の温床・家庭を消滅させよ」,「すべての食事は公共食堂で」,「公共食堂に固執する毛沢東」,「農民の胃袋を支配した独裁政治」)

第4章「五つの風が吹き荒れる」(「共産風は歴史のお笑い種」,「統計を捏造する“誇張風”」,「毛沢東の思いつきで悲劇が拡大」,「“五つの風”はなぜ起こったか」)

第5章「来年の種粃まで拠出する」(「強制買い付けで飢える農民」,「国家中枢に食糧を集中せよ」,「食糧過剰を心配する毛沢東」,「農民の飢えを信じない党」,「農村を搾って都市を守る」)

第6章「彭徳懷を毘にかけろ——廬山会議」(「蛇を巣から誘い出す」,「彭徳懷の“意見書”」,「配布された手紙」,「劉少奇,林彪は保身に走った」,「用心深く立ち回った周恩来」,「“彭徳懷反党集団”をでっち上げる」,「全土に広がる反右傾の烽火」)

第7章「毛沢東よりさらに左を行く——四川省」(「毛沢東の地方視察」,「毛のさらに左を行く李井泉」,「最長だった四川の飢餓」,「“疫病”であって“飢餓”ではない」,「農民は骨と皮,幹部は肥え太る」,「命を救う動き——包産到戸」,「反右傾が飢餓を悪化させた」)

第8章「所有という解毒剤——安徽省」(「万物枯れる共産風」,「日常茶飯の人肉食」,「清廉な英雄への猛攻撃」,「釜を取り上げる」,「責任田——はっきりしない毛の態度」)

第9章「幻の反革命集団——甘肅省」(「反革命集団の大本営」,「壮大なでたらめ——利水工事」,「逃げられない民」,「餓死率が中国最悪の省」,「〈不良分子〉が資本主義を復活させる」)

第10章「毛沢東への忠誠度と餓死者の数は比例する」(「孤児の大量発生——雲南省」,「略奪の横行——山東省」,「万人坑——貴州省」,「香港への逃散——広東省」,「偽りのパレード——広西チワン族自治区」,「豊穡の地の飢餓——江蘇省」,「量産される犯罪者——青海省」,「毛への忠誠が飢餓を生む」)

第11章「危機に毛沢東はどう対応したか」(「毛沢東が修正を始める」,「一時しのぎの責任田」,「都市人口を削減して農村へ」,「食糧があっても大量の餓死」,「食糧を海外に輸出していた」,「責任を天災とソ連に転化」,「絶対的な権力は必ず腐敗する」,「毛沢東の王侯生活」)

第12章「会議政治——毛沢東独自の権力奪取法」(「中国最後の皇帝・毛沢東」,「毛ひとりが生活と資源を統制する」,「武力で守られる極権政治」,「会議政治で権力を奪う」,「制度を修正できない致命傷」)

第13章「劉少奇の台頭と失脚——文化大革命まで」(「翳りさす毛沢東の権勢」,「その名は餓死者とともに刻まれる」,「鄧小平を警戒せよ」,「毛沢東,必死の巻き返し」,「高まる劉少奇の声望」,「劉少奇を小指一本で打倒する」,「文化大革命に到る道」)

附録「毛沢東 大躍進秘録・関連年譜」

原書は,全28章であり,餓死者が多かった省毎の詳しい様子を記している。

②『毛沢東の大飢饉——史上最も悲惨で破壊的な人災1958~1962』(フランク・ディケーター著,邦訳は全572頁,訳者は中川治子,草思社,2011年7月,税込2,940円。原書はMAO'S GREAT FAMINE; The History of China's Most Devastating Catastrophe, 1958-1962, by Frank Dekötter, 2010年)。②書の著者フランク・ディケーターは,ロンドン大学・香港大学教授。1960年オランダに生まれ,スイスで学び,対外開放以後に中国に留学し,香港大学の

関係者の協力を得て、公開された地方政府所属の檔案館資料を多量に閲覧して記録を集めた。また大躍進、大餓死を経験した地方幹部たちにインタビューしたり、また一人一人の言動について具体的に資料的に裏づけしたりしながら、全国的な「大飢餓・大餓死」の実態に迫り、この優れた記録書を完成した。

第1部「ユートピアを追い求めて」(「毛沢東の二人のライバル」,「競り合い開始」,「階級の粛清」,「集合ラッパの合図」,「衛星を打ち上げる」,「砲撃開始」,「人民公社」,「製鉄フィーバー」)

第2部「死の谷を歩む」(「大飢饉の前触れ」,「買い漁り」,「成功による眩惑」,「真実の終わり」,「弾圧」,「中ソの亀裂」,「資本主義国の穀物」,「出口を探す」)

第3部「破壊」(「農業」——食料モノポリー, 指令経済の代償=生産量の水増し, 耕作地の消失, 流通の破綻, 繊維製品の欠乏, 家畜頭数の激減, 農機具の劣化。「工業」——ノルマに追われ粗製濫造, 現代版“苦力”, 大赤字でも倒産しない。「商業」——無駄の積み重ね, どんどん長くなる「行列」, インフレの進行, サービスなしの「服務組」。「建築」——巨大モニュメント狂, 歴史遺産がめちゃくちゃ, 丸裸にされた農村, 巨大水利事業で故郷を失う, 墓を暴き, 亡骸を肥料に。「自然」——屈服させるべき敵, 森林の濫伐, 大洪水・旱魃, 土壌のアルカリ化・塩化, 大汚染, スズメ退治の愚考)

第4部「生き残るために」(「飢饉と飽食」,「策を講じる」,「ずる賢く立ち回る」,「敬愛する毛主席」,「強盗と反逆者」,「エクソダス」)

第5部「弱者たち」(「子供たち」,「女たち」,「老人たち」)

第6部「様々な死」(「事故死」——安全軽視は宿痼, 労働災害。「病気」——医療現場の崩壊, 伝染病は即座に軍が隔離,「集団化」が病気をつくる, 泥土を食べる, 餓死者。「強制労働収

容所」——「労改」が生産に貢献,「私立刑場」が乱立。「暴力」——「鶏を殺して猿を脅す」, 拷問の記録, 弱者を間引く, ゲリラの“新兵訓練所”, プレッシャーの連鎖, ナチ式のクラス分け, 袋小路に追い込まれ自殺。「戦慄の地」——飢餓の代名詞・河南省信陽地区, 恐怖政治・甘肅省通渭県, 死亡率10パーセント・四川省重慶地区, “ミニ毛沢東”たちの欺瞞・貴州省赤水県, 荒涼たる穀倉地帯・山東省斉河県, 逃げ道なし・安徽省。「人肉を食べる」,「死者の最終集計」(亡命幹部による数字),「正常死」と「非正常死」, 平均死亡率から割り出す, 人口統計学者によるベースライン)。

終章「文化大革命への序奏」

2. 両著書の内容、特徴、功績について

両著書の以上の「目次」の紹介をただで、「大躍進」政策によって起こった史上未曾有の大餓死事件の残酷さわまりなき内状, またその原因をつくった党幹部たちの計画経済の杜撰さと餓死事件に対する隠蔽と責任回避の態度, そして無恥無責任としか言いようのない愚劣さわまりなき事後処理, 等々の全体の状況が分かると思う。

目次を見ても、本書が膨大な檔案資料に基づいて、きわめて正確にその実情を伝えていることがわかる。餓死者の総数について、①書は「約3600万人」、普通なら誕生するはずの新生児が4000万人と推定している。また死者の総数については「原書」では種々の統計数字と諸説を検討している。②書も、「死者の最終集計」の項目で、種々の説を紹介し、検討している。その結果が「約4500万人」という数字である。評者は、人口統計学なるものを全く知らないで論評することができない。諸説があるが少なくても3000万人ほど、多くて7000万という違いがある。どちらにしても想像を絶する数字である。

両書の特徴は、檔案資料に出てくる統計数字を

詳しく紹介したところにあり、記録的価値が高い。例えばそのごく一端を紹介する。大躍進が始まった1958年末に、早くも山東省では67万人が飢え、安徽省では130万人が困窮状態にあった。広東省でも100万人近くが飢えていた。雲南省曲靖地区では1958年5月以降、14人に1人、およそ1万2000人が餓死した。同省では58年全体では8万2000人が餓死した。飢餓農民が大量に都市に流入したので、国家統計局の李富春は、1961年末までに1230万人を都市から退去させ、更に翌年には780万人を送還する予定だと言っている。1959年5月、劉少奇は毛に、「省委員会同志の話によると、湖南省の家屋の40パーセントが破壊された」と報告した。四川省でも「家屋破壊率は45パーセントから、ひどい県では70パーセントに達した」。これは、共同食堂に反対する農民を家から引きはがし、軍隊的に集団化に集中するためであった。推計によると、労働改造所の収容者数は、チベットを除いて1960年に全国で180万人ほどであった。全国で大躍進期の収容者数は年間800万人から900万人、飢餓時期の収容所内の死者数は、推定約300万人であった。一般農民では河南省では3年間に300万人、四川省では1000万人が餓死した。次いで安徽省では500万～600万人、山東省では185万～300万人、貴州省では90万～175万人、広東省では48万～66万人、雲南省では50万～80万人等々の人が餓死した。細かいのでは、「南京市などの都市では、年毎に捨てられた子供が数千人単位で見つかっていた」、「広州北部の城県のある人民公社の二人の書記は、34人の女性をレイプし、或いは性交を強要した。また別の村の書記は27人をレイプした。こうしたことは何処でも見られた」等々。余りに多くて書ききれない。①書も、記述の信憑性を高めるために実に詳細な多くの統計数字を掲げている。ところで、どちらかと言えば、①書の方が、国際政治と国内政治の動向を紹介しつつ、党内の権力闘争の側面や1950年代全体の歴

史過程の中から、この大餓死事件に到る過程を浮き彫りにしているが、②書は、この3年間前後の飢饉と餓死の実例を、全国的に且つ網羅的に発掘し、紹介することに集中していると言えよう。この両書を越える本格的且つ正確な資料に基づく研究書、記録書は、一党独裁が終わらない限り、この世に出ないのではないかとさえ想像される。両書はそれほどの、記念碑的な書物である。

3. 地獄の最後の扉を開いた「人民公社」の「共同食堂」について

両書とも「人民公社」と「公共食堂」の諸悪を、根本史料に基づいて精査し、次のように云う。1955年から始まった本格的な集団化は、次第に加速の度を高めた。そのため各地で農民の抵抗が起こった。農民は、「合作化、統一買い付け、統一販売」に反対して、56年には脱退者が続出した。党は、彼らを「地主・富農分子」、「資本主義の傾向を持つ者」として多数逮捕し、殴打し、富農・反革命・犯罪者とし、厳しく処罰した。一方で社会主義教育運動を展開し、全国で何千万、何億という人民を動員し、水利灌漑等の大土木事業を展開した。こうした状況を前提にして、支配の観点から見れば、工業、農業、商業、学校、軍隊を一緒に統一することが理想になった。「人民公社」、これこそマルクスが云った現代の「パリ・コンミュン」ではないか、古代に張魯がつくった新しい「五斗米道」、康有為がいう「大同の世界」の実現ではないか、毛の幻想は一挙に燃え上がった。毛の「人民公社好」の一言に全国党員は答えて、数か月足らずで全国農民の99パーセントが組織され2万6576個の人民公社が誕生した（後に5万2781個に細分化された）（②書）。

1958年、毛とその部下たちは、国家が直接に人間を軍隊式に把握し、すべての私有財産を失くし、家庭から人間を解放し、人民公社に組織し、遂には「共同食堂」で食事まで集団化し、全生活を兵

営共同体化することが共産主義への未来を約束する理想形態だと妄想した。毛は言った。「家庭が無くなれば、人々は家事労働から解放される。これは共産主義社会への第一歩である」と。毛は高らかに「全民皆兵」を宣言したので、1958年の後半の極めて短い間に、人民公社が全国に設立され、共同食堂、全寮制保育園、集団宿舍、突撃隊等々、社会のあらゆる生活が軍隊的に組織された兵営社会になった。あと2年か3年で理想の共産主義社会が実現すると党中央の幹部たちは、国民を大いに煽った。しかし、このことは人間を家畜化する、地獄の最後の蓋を開けることになった。

毛の言葉を聴いた中央地方の幹部たちは、大いに進軍ラッパを吹きならし、「突撃」を開始した。宣伝部の役人たちは、それを壮挙として煽りたてた。マスコミは、一斉に阿諛追従の記事を書き、荒唐無稽の数字を「人工衛星」（新記録の譬え）を打ち上げたと宣伝した。かくして、毛でさえ、そのあまりの「壮挙」に酔いしれ、「記録的な想像をはるかに超えた大豊作」によって、「穀物が有り余る」ことを憂慮し、作付面積を大幅に削減したらと、本気で心配した。農民は、共産主義だから「必要に応じて消費し、自由に働くだけで良い」「1日に5回の食事をしなければ、大豊作の穀物を食べきれない」のだと解釈した。食料は湯水のように浪費された。しかし、実は1958年秋に、早くも飢饉は始まっていたのである。農民の食卓は一掃され、家畜も穀物も公共食堂に取り上げられた。多くの農民は共産主義だと云うことで、人民公社に集まった穀物と肉をたらふく食い、また自分の私有物ではなくなると云うので、飼っていた家畜を殺して皆食べてしまった。家から離れることを拒否した農民は、村の幹部から殴られ、家屋も破壊された。はては鍋釜茶碗まで没収され、土高炉に放り込まれた。1959年初頭から、大飢餓は全国化しつつあったが、地方の官僚は毛に実態を報告せず、史上未曾有の豊作、史上希に見る新

天地の到来と嘘の報告を集中した。四川省、安徽省、甘肅省、山東省など毛に忠誠を誓う度数が高いほど餓死者が増大した。有頂天になった毛は、この大豊作を信じて、国家が強制的に買い付ける統一価格を低くし、統一購入の穀物の量を増やし、部下にノルマを課し、周恩来が管理・執行し、沢山の穀物を海外に輸出したり、援助穀物として他国に支給したりした。その上、ソ連からの借款を直ちに返還すると大見えを切り、借款を期限より早く返済した。

全人民を公共食堂に集め、集団的な食事を強制することは、老人・子供・病人・身体不自由人など弱者にとっては、耐えがたい苦しみである。遠方の食堂に、夏の猛暑、厳冬の冬、または大雨の日でも、日に3度、通わなければならない。僻村の農民は、1キロ、2キロと往復を繰り返した。食器、テーブル、椅子などみな共同食堂に集められた。食堂で待っていたのは、長い行列と老人や病人・子供には食べられないような粗末な食事、炊事担当者のえこひいき、幹部たちの強権的な態度だった。幹部たちは穀物や肉を横領し、不足分は農民から暴力で強制徴発した。地方幹部は、穀物や家畜が無くなるのは、農民が隠している、また旧地主階級・富農階級と反革命分子、階級異分子、悪質分子が様々な妨害を行い、抵抗しているからであると考えた。各地で抵抗する農民の家屋を破壊し、食器と家財道具を没収し、死ぬまで殴り続けた。命令、暴行、処罰、強制、投獄、殺害は日常茶飯事となった（①・②両書）。

両書には、地方の幹部が日常茶飯事の如く農民に暴力を振るっている状況が克明に紹介されているが、それは彼ら自身も独裁権力機構の歯車にされているからである。自分が歯車にならないければ、ただちに上級幹部から「階級敵（右派分子、地主富農分子、階級異分子、悪質分子、脱落分子）」とされて排除され、暴力的な懲罰の対象になり、労働改造所に放り込まれるか死刑等を含む厳罰を

加えられる。あらゆる党員が、上部には奴隷の如く、下部には暴君の如くに振る舞わざるを得なかった。「共同食堂」こそ、共産主義社会の入り口でないばかりか、究極の人民の奴隷化、家畜化の姿であった。もはや、1958年以降の大量餓死者の発生は避けられなかった。毛は、断片的には餓死者の発生を知っていたが、それを認めることは、自己の最高責任を認めることに等しく、内外に喧伝していた「革命の英雄、建国の英雄、世界の社会主義陣営の指導者」なる嚇嚇たる権威を失うことであったから、餓死者の大量発生を認める勇氣はなかった。反省するどころか、なおさら意固地になり、また「大躍進」の幻想にすがった。四川省の第一書記李井泉は、1000万近い餓死者を出しながら、1962年に「われわれは軟弱ではない。われわれはより強くなっている。われわれは革命精神を守ってきた」と言った（①②両書）。

4. 独裁者の「責任転嫁の論理」＝「階級闘争理論」について

恐るべき餓死者が出ていると云う最初のニュースは、河南省信陽地区からであった。信陽の餓死事件については、①書が詳細に記している。信陽地区は、18の県と2つの市を含めて人口約850万人を擁する地区であり、肥沃で且つ政治的な先進地区とされていた。先進的とは、鋭い政治運動が次々に展開されたという意味である。政治運動が起こるたびに、新しい記録が報告され、前任者たちよりも高い成果と達成目標が更新された。反右派闘争が起これば、地区内の書記等の幹部は批判の後に一掃され、新しい執行部が登場した。彼らは、前任者たちよりも誇大な成果と目標を掲げ、区内の農民を動員し、彼らに命令し、抵抗したり正直に報告したりするものに絶えず暴力を振るった。②書によると、1959年から60年にかけて、湖南省黄材ダムで働いていた農民1万6000人のうち、4000人が殴るけるの暴行を受け、400人が死

亡した。河南省信陽地区では死者100万以上であったが、その内民兵に殴り殺された者は6万7000人に達した。①書によると、1958年から59年にかけて100万以上の餓死者が出たことを知った党中央は、調査団を派遣して確認した。毛を始め党中央は、このような惨酷な大事件は、大量の悪人がこの地区で党内に入り込み、権力を独占し、反党反社会主義の悪事を働いた結果だと解釈した。毛は言った。「信陽では非常に多くの地主、富農、反革命分子、悪人が指導権を収奪し、悪事の限りを尽くしている。1つは地主や封建制力がわれわれの隊伍の中にもぐりこんでいる。2つ目はわれわれの仲間が変質してしまった。3つ目は深刻な官僚主義である。彼らは、人を殴ったり殺したりするのが習性になっている」と。すると劉少奇も同調して言った。「信陽の地主階級は復活した。信陽の人民は2度目の解放が必要である」と。こうして、現地幹部の責任が追及されることになった。かくして党中央から特捜隊が派遣され、「反右傾運動」が起こされ、信陽地区にいたこれまでの幹部は反革命分子と指弾されて、逮捕のうえ死ぬほど拷問され、引き回された。彼らの大多数は、毛の「寛大な処置」によって殺されなかったが、旧封建階級の敵であるとして打倒された。つまり、毛を始めとする党中央の責任は現地の末端幹部に転化され、人民を救ったことになった。飢餓が省全体に広がると、省の幹部まで責任を取らされたが、末端に行くほど責任追及は激しく、一貫して毛に忠実で、徹底的に嘘を貫き、1000万人もの餓死者を出した四川省の第一書記李井泉、雲南省第一書記謝富治などは、逆に出世した。毛を中心とする党中央には大量餓死に対する責任はないとされたので、「大躍進＝大飢餓」政策は、1961年まで続行された。四川省では、餓死は62年まで4年間も続いた。

5. この大飢饉の「責任」について

毛沢東は原因について、信陽事件が発覚した時には、党内に残っている地主富農分子、右派の仕業だとしたが、「3分の人災、7分の自然災害」と言った。61年、劉少奇は、この比率を逆転して毛の責任を指摘したので、後に文化大革命で打倒される原因となった。この餓死事件に対する中共の公式の見解は、主な原因として次のように説明する。3年間に及ぶ自然大災害、及びソ連のあこぎな仕打ち（借款の急激な返還要求、技術援助の打ち切り、ソ連技術者の総引き上げ）が主要なもので人災の部分は3分というものであった。しかし、両書によると全く異なる。両書の基本的な観点は「100パーセントの人災」というものである。

毛は始皇帝以来、中国で2000年も続いてきた専制主義の伝統に、党員に対する「鉄の規律」というスターリン主義を接ぎ木したために、史上未曾有の「極権政治」をもたらした。当時は、前近代の専制主義に比べれば近代的な技術が発達して、ラジオあり、新聞あり、その他の手段が格段に発展していたので、極権政治の弊害もまた空前の規模になったのである（①書）。恒常的に階級敵と戦い、彼らを消滅することがイコール理想社会の実現であると云う理論は、人間の中にあるすべての劣情を満面開花させた。例えば、独占欲、権力欲、名誉欲、征服欲等の原始的な欲望から発するところの、羨望、嫉妬、猜疑心、傲慢、競争、阿諛、追従、妬み、嫉み、苛め等のあらゆる劣情が一挙に爆発した。この劣情は、「無産者階級の解放の理論」、「プロレタリアートの崇高な階級意識」、「共産主義者の鉄の規律」、「党員の使命倫理」などという「高邁な理念」で包まれていたが、人間の全ての劣情を満面開花させたのである。そして恐怖と暴力に皆震え上がる独裁体制が生まれたのだった。

農民は、大躍進という名の飢饉政策に個々には、「家畜の屠殺、列車や穀物倉庫の襲撃、人民公社

からの物資の掠奪、他所への逃亡」等々かなりの抵抗をしたが、一方で、毛沢東を本当の皇帝が出現したと信じる一面もあった。「村の状況がいかに逼迫していようと、毛主席は心底人民の利益を優先してくれるにちがいないという“希望”があった。皇帝の時代には、皇帝は慈悲深いが取り巻きが墮落しているという考えが根付いていた。中華人民共和国ではなおさらだった」。真の皇帝である毛主席は神であるという信仰が、農民に「救い」の到来を待ち続けさせることになった。だから、もしも毛が、政策の誤りに気づいてさえいれば、「すべては違っていただろう」と言う（②書）。中国専制主義の歴史の中で生まれた、農民大衆の「真命天子降臨」の信仰も、この大餓死という現象の誕生に一役買ったのだという指摘は、実にユニークである。

どうして、知識人はこのような暴進に対して反対しなかったか。毛は1955年に党独裁に批判的な胡風など大知識人約100人弱を逮捕して「焚書坑儒」に処した。57年には、「丁玲・陳企霞反党集団」を摘発し、北京大学の学長馬寅初の人口論を批判し、また民主諸党派の指導者を弾圧した。さらに「百家争鳴、百花齊放」によって党内外の批判分子をまとめてあぶり出した。このリストによって「反右派闘争」で、学者・教師・学生などを中心にした約55万人の「右派」（準右派等を含めると300万人以上に及ぶ）を打倒した。こうして地ならしを終えた毛は、翌年の1958年、「大躍進、人民公社、社会主義の総路線」の「三面紅旗」を掲げて、全国民を全世界で一番早く「共産主義社会」に突入させるのだとし、全国民を熱狂主義の坩堝に叩き込んだ。直ちに現出した飢饉状態を知って、廬山会議で恐る恐る忠告した彭德懷・張聞天・黄克誠等を打倒して、全国的に「反右傾運動」を展開した。かくして、全国民を3年間も続く「大餓死」への道へと突進させた。もはやここで党内外を問わず、毛を批判し、反対意見を述べる人はい

なかった。毛は競争と恐怖を武器にして臣下を威嚇し、彼らに身分・地位・役職を与える権利を独占し、すべての権力と権威を一身に集中した。これに比例して、劉少奇・周恩来・朱徳などは追従し、あるいはオベッカ使いになり、幹部はみな媚び諂う家臣集団になり果てた。毛は、神なき神の王国を「マルクス」の名において夢想し、伝統的な天下国家概念である皇帝支配の「王土王臣」国家を完成したのである。党員は皇帝に仕える奴隷的な家産官僚集団になり果てた、ということができる。家臣たちは皇帝の幻想（地上に共産主義の王国を実現するというユートピアの王国）を先取りして、全国土に「人民公社」を打ち立て、都市民と農民を区別し、両者の自由な往来と移住・移転を禁じ、さらに国家が農民の穀物・肉・卵・野菜まで統一価格、統一購入で取り上げる、史上最高の専制国家体制をひと夏で実現した。組織の軍事化、行動の戦闘化、生活の集団化が、至上命令になった。かくして、中華人民共和国の8割を占めていた農民は、建国後10年にして、私的所有、私的自由をすべて失った。党書記階級は、人民を動員して集団労働をさせ、あたかも軍団を率いる将軍のように農民に命令し、ノルマを課した。命令に違反したり、反対したりした者は処罰され、或いは殴打されるのが当たり前のことになった。威嚇・命令・処罰・殴打等々の、まさに、レーニンが1917年の革命直後、しかも大戦中で内戦が続いた時期に行った「戦時共産主義」の時代、及び「赤色恐怖」の時代が、始皇帝時代を遥に超える規模で襲来した。評者はかつて、右派にされた人物に「どうして土高炉で鉄ができると思ったのか」と尋ねると、理工学系の学問をやったこの知人は、「反右派闘争で知識人が弾圧されたので、馬鹿げたことをしている、と皆が知っていたが反対できなかったのだ。言え、大変なことになった」と笑った。中国民衆は、1950年以後の土地改革、「剿匪反霸」以来、「階級の敵」が暴力を振るわれた

後に「公開銃殺」される場面を絶えず見せつけられてきた。この恐怖心は、民衆を心の底から怯えさせた。楊繼繩は、まだ子供時代の1950年に地主など14人が殴打された後に銃殺される場面を目撃した、と書いている。

6. 残された問題について

実は、この毛沢東時代の「大飢餓・大飢饉」とほとんど同じ事件が、既にスターリンによって引き起こされていたのである。ステファヌ・クルトワ、ニコラ・ヴェルト共著『共産主義黒書——犯罪・テロル・抑圧——〈ソ連篇〉』（外川継男訳、恵雅堂、2001年）の「第8章、大飢饉」（168～178頁）を読むと、毛沢東時代の「大飢饉」の状況と瓜二つであることに驚く。スターリンの「大飢饉」は、1932～1933年にかけて起こった。餓死者は約600万人以上。前年から始まったコルホーズへの農民の強制集団化政策、突撃部隊による穀物の強制徴発（農業生産物の強制徴発率は、ウクライナ30%、北カフカスのクバン平原38%、カザフスタン33%等々）、抵抗する農民に対する暴行、厳罰、収容所への強制収容、抵抗する者に対して「サボタージュ参加者、反革命主義者、社会的異分子、地方主義者」等のレッテルを貼り、処刑を含む厳罰を加え、都市へ逃亡しようとする農民の脱出を防ぐ検問所を設けてそれを阻止した。ここでも飢餓農民の人肉食、子どもの売買、疫病の蔓延など「毛沢東の大飢饉」時代と全く瓜二つのことが起きている。違いは、毛の場合は、はるかに徹底的、且つ全面的であり「共同食堂」まで及んだ点であろう。まさに、スターリンの集団化による農民への攻撃よりも遥かに人口の多い中国全土で行われ、スターリンよりも数倍上回る餓死者を出したことだった。こうしたことは、世界のあらゆる社会主義国でほとんど例外なく起ったが、北朝鮮ではそれが半世紀も続いている。毛の路線はカンボジアのポルポトの大虐殺にまで大きな影響を及ぼ

した。

両書には、当時の党員幹部たちの教育・教養については、全く言及がない。実は、大躍進を含む「三面紅旗」を中央と地方で指導したのは、ほとんど教育とは無縁な無学の人だったのである。特に省・専区・県・人民公社の党員幹部には、大学卒、高校卒の人は全くと言ってよいほど居なかった。党の理論によれば、貧農下層中農は革命の母体であり、もっとも人民的且つ革命的な基礎階級である。中農は、貧農の友である。しかし、富農は敵であり、地主階級は最大の敵である、とされた。1949年の建国と初期の土地革命によって最も知識と教育があった地主富農階級は、完全に絶滅された。従って、ほとんど字も読めず、学校に行ったこともない農村の党員・幹部が、社会主義政策、三面紅旗を指導したのである。彼らは、社会主義も、共産主義も、実は何も知らなかった。人民公社や労働改造所（略称「労改」）で絶え間なく暴力を振った党幹部も、昨日までは「ただの無学な貧農」に過ぎず、ほとんどがマルクスのマの字も知らなかった人々だった。毛や中央の幹部の大多数も、一知半解の社会主義理論を振り回しただけであった。毛も実は、共産主義のイメージは後漢末に起こった宗教反乱における「太平道・五斗米道」を讃えた、という点に象徴的である。毛は、中央政治局会議に、この古代の宗教反乱を記した歴史書の中の「張魯伝」をコピーして配布したという。何と云う時代錯誤であろうか。

しばしば記した河南省『信陽県志』によると、解放以前の県の人口の内、80パーセントを占める32万人が字を読めず無学であった。1964年の人口統計では、57.8パーセントを占める34万人が全く字を読めないか、ほんの少し読めるだけであった。党員だけみれば、1957年まで大学卒・高等専門学校卒の党員はゼロ、翌58年に大卒党員は一人に過ぎなかった。党員の無学非識字の比率は、1955年が44.7パーセント、56年が35.6パーセント、57年

が36.5パーセント、58年が20.3パーセントである。1982年になっても、人口の34.3パーセントが小学卒で、非識字・半非識字者が25.83パーセントを占めていた。こうした文化程度は、この信陽県ばかりでなく、全国的な状況だった。これでどうして、10年でイギリスを越え、15年でアメリカを越える豊かな国ができよう。大多数の地方党員は、社会主義、共産主義の何たるかを、全く理解していなかったと言わざるを得ない。彼らに想像できたことは、共産主義とはただ財産を共有すること、財産を共有すれば、すぐたらふく食える理想社会が来ると誤解することだけであった。毛沢東時代の1958年当時の全国人口は約6億5000万人であり、その内の80パーセントが、文字をまともに読めず、ほとんど学校に通ったこともなかったのだ。プロレタリア独裁の実態は、かかる無残なものだった。中国の大多数の農民が無学で字を知らなかったのは、2000年続いた専制主義と家産官僚制が人民を無知な状態にし、真実を知らせないようにしてきたからだった。共産党も同じで、無知な大衆・農民こそ支配しやすいのである。もちろん日本の侵略戦争にも大きな責任がある。

党員から一般大衆まで、ただ壮大なる幻想に過ぎなかった「共産主義」を目指すためには、頼るものは「暴力」以外にありえなかった。そして暴力だけは、1949年以来の「剿匪反霸運動」から唯一の「階級闘争」の手段だった。信陽県では、この1つの政治運動だけで匪賊、土豪などの悪覇の親玉540人、匪徒・ゴロツキ1900人、悪覇地主2721人を摘発し、それらを厳重に処罰した。この時も多数の人が暴力を加えられ、主な被告の多くは処刑・投獄された。その家族もまた黒五類に区分された。新中国では、建国以来、暴力は党員の常套手段であった。全国最大の餓死者を出した河南省信陽地区では、100万人の餓死者の内6、7パーセント、つまり6万人から7万人が地域党幹部によって殴り殺されたのだった（後に国家主席と

なった李先念の調査)。毛は、「中国は遅れた状態であり、文化的には白紙状態である。だから白紙には自由に絵が描けるのだ」という逆説を展開して誇ったが、自ら描いた絵は、全く絵を描けない素人による史上最悪の醜悪な絵になったのである。無知無学ほど恐ろしいものはない。半世紀以上にわたる度重なる政治的弾圧によって、中国知識人・学者の大多数は今もって完全な言論の自由はなく、沈黙することを余儀なくされている。南京大学の高華教授は、勇気を出して大著『紅太陽是怎样升起的』（毛沢東が中央革命根拠地と延安時代に、いかなる権謀術数を使って独裁者になっていったか、この全過程を追究した高教授畢生の大作。全700頁、邦訳はまだない。香港、中文大学出版社、2000年）を出版したが、晩年は不自由を強いられ、また重病にも関わらず治療も十分できずに昨年12月、57歳で不遇の中で死んだという。一党専制こそ中国農民大衆を暗愚にし、また支配者自身をも墮落させる根本原因である。最近暴露された「薄熙来夫妻事件」や盲目の人権弁護士陳光誠事件が、党幹部の底なしの腐敗と自由、民主、人権を抑圧する専制主義の欺瞞を象徴している。薄は、「雷鋒に学べ」と声高に叫んだが、自分の子供は英米で湯水のごとく金を使って遊んでいたと云う。

最後に一言。毛時代の「大飢饉・大餓死」事件のような重大な研究テーマに、日本人中国研究者がほとんど取り組まないという状況がある。ディケーターの『毛沢東の大飢饉』や高華の前掲著書には、多くの参考図書が掲載されている。しかし、その中に日本人研究者の本格的な著書は一冊もない。これは日本人の研究が日本語でしか発表されないためであろうか。そういうことも少しはあるが、日本人研究者は中国共産党の肅清・餓死事件、腐敗、人権弾圧、少数民族等々の「危険で深刻な政治問題」の調査やその歴史の研究を避ける傾向があることが最大の原因だろう。人畜無害な

テーマで遊んでいた方が、政治的な危険がなく、気が楽であり、仕事も簡単であり、論文数も増える。こうした国内的にも国際的にほとんど何の価値もなく、また影響力もない趣味的な著書・論文の単なる垂れ流しの状況は、私も含めて大いに反省すべきことであろう。日本人学者一般が危険なテーマは避ける、つまり空気を読んでいとしか思えない。自戒の意味を込めて敢えて言えば、自分の研究には、いかなる価値があるのか、今日このようなテーマで研究することに意義があるのか、中国研究者としての自己のレーゾンデートルは何か、自分の研究は世界的標準で第一線に立っているか、等々について、学者という名の付く人は考えるべきであろう。楊、ディケーターの両氏及び高華氏は、個人でも勇気を以て奮闘すれば、質量ともにかかる記念碑的な仕事ができることを証明した。最後に、この大著である両書を書かれた二人の著者の勇気と努力、及びこれを苦勞して訳された伊藤正、田口佐紀子、多田麻美、中川治子の諸氏の御努力に心から敬意を表したい。最後に再び一言。以上に論評、言及してきた書物は、中国では自由に購入したり、閲覧したりすることはできないという。